

# 日本における大学教育の国際化 ：東京大学秋入学導入をめぐる

吉川 真理子

Mariko Yoshikawa

## *Abstract*

In January 2012, the University of Tokyo, a leading national university in Japan, announced its intention to change the start of the academic year from April to September. This change would align the academic schedule of the University of Tokyo with the majority of universities in the world. It was stated that this change would facilitate the University of Tokyo to become more globalised and enable it to raise its global competitiveness relative to its academic peers. However, there are other issues that universities need to become globalised. In this article, I will analyse how the University of Tokyo is regarded internationally, and then discuss the nature of insufficient globalisation in Japanese universities. It focuses on the importance of having internationally recognised academics on staff in universities, and indicates currently how universities in Japan lack strategies to attract reputable academics. It also gives some suggestions for universities to overcome the obstacles to achieve raising the numbers of international students with excellence

## 1. はじめに

1999年に行われた大学設置基準の大綱化以降、20年以上に渡り「大学教育改革」と言う政策の下に様々な事業が押し進められてきた。しかしながら、世界レベルの大学教育と比較する時、その改革の速度は遅く「失われた20余年」とも揶揄されることがある。

そのような状況下、2011年1月20日、東京大学（以下、東大）が、2017年度をめどに、大学への入学時期を、現行の4月から9月に全面的に移行する検討に入る「秋学期入学への移行計画」を発表した。同大学「入学時期の在り方に関する懇親会」の中間報告<sup>1</sup>によると、グローバル化した社会に対応する高度な人材を育成すると同時に、「世界的な知の拠点」という社会の付託に応える

ための一つの方策として、秋学期入学という大きな教育改革を行うとしている。

秋学期入学をすでに実施している大学もあるが、日本のリーディング大学と言える東大が、「入学時期の全面変更」という、明示的な形で大幅な教育改革を行うことは、日本社会全体に対する影響が非常に大きいと言える。この発表を受けて即座に、平野文部科学大臣、古川国家戦略担当相が次々に賛意を表明し、日本経団連<sup>2</sup>、産業競争力懇親会<sup>3</sup>等も賛同している。

東大の秋学期入学は、大学教育のみに留まらず日本の教育全体の改革や、企業を含むあらゆる組織、日本の社会通念の有り様も変化させる可能性を秘めている。また、この改革は、日本社会全体に「グローバル化への覚悟」を持たせるという観点から意義深いとも言える。

本稿では、日本を代表する東大が秋学期入学という新しいシステムを導入する事で、「大学の国際化」をいかに果たそうとしているのか、また日本において大学が「国際化」するにあたり直面する課題を検討する。

## 2. 秋入学導入による学部現行システムに生じる変化

前述の「入学時期の在り方に関する懇親会」の中間報告によると、秋学期入学全面的移行によって、大きく変化する点として6項目が挙げられ、それぞれのメリット・デメリットが示されている<sup>4</sup>。

各項目は、以下の通りである。

- (1) 国際交流：国際的にスタンダードな学事歴と整合する
- (2) 授業期間：学期の途中に長期休業が入らない
- (3) 入学前：高校卒業から大学入学までに空白期間が生じる  
(ギャップターム)
- (4) 入試：入試の実施時期を集約する事ができる（大学院も秋学期に一本化する）
- (5) 卒業・就職：卒業が夏、就職が秋以降となる
- (6) その他

次に本論に直接関連する秋学期入学導入のメリット・デメリットを抽出する。

(1) 「国際交流：国際的にスタンダードな学事歴と整合する」

メリット

- 留学（サマープログラム等を含む）がしやすくなる
- 優秀な留学生を受け入れやすくなる（特に短期）
- 優秀な帰国子女を確保しやすくなる
- 教員交流がしやすくなる
- バーチャルな国際交流（遠隔共同授業など）がしやすくなる



国際性の涵養

異文化体験等武者修行による士気や自己認識の向上

デメリット

- 従来あった外国人留学生の日本での準備期間や予備教育に当てる期間が無くなる。国費留学生は渡日から入学までの期間が長くなり減少するおそれがある
- 日本の高校生の優秀な層が他大学（海外を含む）へ流出するおそれがある
- 教員の国内大学等との交流や連携活動に支障が生じるおそれがある

また、国際的な大学間競争が活発化している事をあげ、優秀な学生・研究者の獲得をめぐる競争が世界的に高まるなか9月入学の重要性を示している（東京大学：2011）。

### 3. 「国際交流と国際性」

#### 3.1. 世界大学ランキングと大学の競争力

世界における大学の競争力を示す指標に大きな影響を与えるものとして、世界大学ランキングの順位があげられる。

この世界大学ランキングにおいて、東大は、ここ数年、微弱ではあるものの下がり続ける傾向にある。昨年度も後述する2つの異なった世界大学ランキングでその順位を下げた。東大が秋学期入学を押し進める大きな理由は、この国際的なランクの下落に対する危機感があると考えられる。

毎年発表されるランキングに一期一優すべきでは無いという意見もあるが、大学の国際的な評価を客観的に受け止め、大学自体が、その強みを知り、弱点を克服していく良い機会となることは、事実である。（下條：2012）。また、国際的評価におけるランキングは、グローバルな視野でとらえた時に、大学の国際競争力と密接な関連がある。すなわち、ランキングは、優秀な教員、研究者、学生の大きな吸引力となり、優秀な教員、研究者の在籍する大学には、世界中から優秀な学生が集まり、その結果、ますますその国際競争力を高めるという必然性がある。

#### 4. 世界大学ランキングから見る東大の「国際性」分析

世界的に注目される大学評価に、英国の高等教育専門誌「タイムズ・ハイアー・エデュケーション Times Higher Education (THE)」の“World University Rankings”と、Quacquarelli Symonds Ltd.（以下 QS 社）の“QS University Rankings”が挙げられる。

「タイムズ・ハイアー・エデュケーション」は、『教育』、『研究』、『論文被引用回数』、『産業界からの収入』、『国際的な取り組み』という5つのカテゴリーと13の評価基準を設定し、大学の教育、研究から知識移転活動まで、大学のあらゆる活動を幅広く精査している<sup>5</sup>（JSPS London: 2011a）。

この機関の東京大学の直近の世界大学ランキング（2011-2012）は、世界30位で、前年度の26位から大きく後退した。また、同ランキングで東大は、2009年には22位、2010年は24位であったことを考慮すると、近年、ランキングの低下が目立つといえる。

以下、同ランキング1位から30位を示したものである。

THE WORLD UNIVERSITY RANKING 2011-2012 Times Higher Education (THE)  
(2011年10月6日)

RANK WORLD	INSTITUTION	COUNTRY / REGION	OVERALL SCORE (100)
1	California Institute of Technology	United States	94.8
2	Harvard University	United States	93.9
2	Stanford University	United States	93.9
4	University of Oxford	United Kingdom	93.6
5	Princeton University	United States	92.9
6	University of Cambridge	United Kingdom	92.4
7	Massachusetts Institute of Technology	United States	92.3
8	Imperial College London	United Kingdom	90.7
9	University of Chicago	United States	90.2
10	University of California Berkeley	United States	89.8
11	Yale University	United States	89.1
12	Columbia University	United States	87.5
13	University of California Los Angeles	United States	87.3
14	Johns Hopkins University	United States	85.8
15	ETH Zürich - Swiss Federal Institute of Technology Zürich	Switzerland	85
16	University of Pennsylvania	United States	84.9
17	University College London	United Kingdom	83.2
18	University of Michigan	United States	82.8
19	University of Toronto	Canada	81.6
20	Cornell University	United States	80.5
21	Carnegie Mellon University	United States	78.4
22	University of British Columbia	Canada	77.4
22	Duke University	United States	77.4
24	Georgia Institute of Technology	United States	77
25	University of Washington	United States	76.5
26	Northwestern University	United States	76.2
27	University of Wisconsin-Madison	United States	75.8
28	McGill University	Canada	75.5
29	University of Texas at Austin	United States	74.9
30	University of Tokyo	Japan	74.3

「タイムズ・ハイアー・エデュケーション」による東大のそれぞれのカテゴリ評価は、「教育」：86.1ポイント、「研究」：80.3ポイント、「論文被引用回数」：69.1ポイント、「国際的な取り組み」：23ポイント、「産業界からの収入」：76.6ポイントである。明らかに「国際的な取り組み」に関するカテゴリの評価が低いことが見て取れる。

ちなみに、トップ10大学の「国際的な取り組み」は、プリンストン大学の49.6ポイントを除き、全ての大学で50ポイントを上回り、オックスフォード大学では、91.1ポイント、インペリアル カレッジ オブ ロンドンでは、92.2ポイントと非常に高い。

同ランキングで、世界50位までにランキングされたアジア地域の大学は以下の4大学である

TOP ASIAN UNIVERSITIES 2011-2012:Times Higher Education(THE)

WORLD RANKING	INSTITUTION	COUNTRY/REAGION	OVERALL SCORE (100)
30	University of Tokyo	JAPAN	74.3
34	University of Hong Kong	Hong Kong	72.3
40	National University of Singapore	Singapore	70.9
49	Peking University	China	65.6

このアジアにおける大学ランキングで、東大は最上位（世界ランキング30位）となったものの、カテゴリ別の詳細を見ると、「国際的な取り組み」カテゴリでは、香港大学（世界ランキング34位）の83.7ポイント、シンガポール大学（世界ランキング40位）93ポイント、北京大学（世界ランキング49位）51.7ポイントと、アジアの大学からも「国際性」に関するファクターでは大きく引き離されている。

一方、QS社は、『学術面の評価』、『学生一人当たりの教員数』、『教員一人当たりの論文被引用数』、『企業による評価』、『外国人教員比率』、『国外留学生



比率』の6つのカテゴリ<sup>6</sup>を基に、合計世界700以上の大学評価を行ったものであり、総合評価に加え、分野別や評価基準別の順位について、それぞれ上位300大学を発表した（JSPS London: 2011b）。同社による世界大学ランキングは以下の通りで東大は25位である。

QS WORLD UNIVERSITY RANKING 2011/2012（2011年9月6日）

WORLD RANKING	INSTITUTION	COUNTRY/REAGION	OVERALL SCORE(100)
1	University of Cambridge	United Kingdom	100
2	Harvard University	United States	99.34
3	Massachusetts Institute of Technology (MIT)	United States	99.21
4	Yale University	United States	98.84
5	University of Oxford	United Kingdom	98
6	Imperial College London	United Kingdom	97.64
7	UCL (University College London)	United Kingdom	97.33
8	University of Chicago	United States	96.08
9	University of Pennsylvania	United States	95.73
10	Columbia University	United States	95.28
11	Stanford University	United States	93.44
12	California Institute of Technology (Caltech)	United States	93.02
13	Princeton University	United States	91.91
14	University of Michigan	United States	91.28
15	Cornell University	United States	90.72
16	Johns Hopkins University	United States	89.96
17	McGill University	Canada	89.56
18	ETH Zurich (Swiss Federal Institute of Technology)	Switzerland	89.5
19	Duke University	United States	89.25
20	University of Edinburgh	United Kingdom	87.83
21	University of California, Berkeley (UCB)	United States	87.64
22	University of Hong Kong	Hong Kong	87.04
23	University of Toronto	Canada	86.16
24	Northwestern University	United States	85.91
25	The University of Tokyo	Japan	85.9

同社ランキングにおいて、東大の『学術面の評価』は、100/100と、ランキング1位から5位に位置する、いわゆる「世界の超一流」とされる大学と同評価を得ている。また、『学生一人当たりの教員数』や『企業による評価』も決して他の上位大学と比較し、遜色がある訳ではない。しかし、『外国人教員比率』（10.8/100）と『国外留学生比率』（29.2/100）のカテゴリーが突出して低い。例えば、トップのケンブリッジ大学と比較すると、同大学の『外国人教員比率』（98.4/100）、『国外留学生比率』（96.9/100）とその差は著しいことが分かる。

また、SQ社の公表する過去の評価では、東大のランキングは、2005年、2006年の19位、2007年17位、2008年19位、2009年22位、2010年24位、2011年25位と、この数年間で後退し、2010年には、香港大学（22位）にアジアのトップの座を奪われたことになる。

以上のように、東大は、その「国際性」において、著しく評価が低く、それが大学全体の世界評価の低下を招く要因となっていることは明らかである。

グローバルなレベルの大学間競争において、「国際性」の低さは、東大の致命的な弱点となっている。このような状況で、秋学期入学導入は、まさに東大の国際競争におけるその地位向上への強烈なメッセージともいえるのである。

## 5. 東大の国際化シナリオ：「グローバル・キャンパスの実現」

### 5.1. 留学生比率12パーセント以上、外国人教員10パーセント以上

東大は、従来の春学期入学を「国際動向との不整合」、「学生、教員の国際交流の制約の一つの要素」とし、留学生や、外国人教員・研究者の東大への吸引を阻害しているという見方を取っている。そして、秋学期入学導入の最大のメリットを「教育の国際化の促進」とし、「学事歴が国際標準と整合することに伴い、学生・教員の国際流動性が高まる」（2011：東京大学）等、国際化の向上を上げている。秋学期入学導入により、学内構成員の多様化（グローバル・キャンパス）、すなわち留学生・外国人教員の増加を期待している。

2011年5月における東大の留学生は、学部生全体比の1.9パーセント（276名）、大学院生においては、18.6パーセント（2690名）となっている。ちなみに、ハー



バード大学では、学部で10パーセント、大学院では21パーセント、全体として21パーセントであり、また、シンガポール大学では、学部で19パーセント、大学院で40パーセント、全体として30パーセントと、非常に高い数値となっている<sup>7</sup>。

同様な傾向として、東大の外国人教員数は、全体の3.7パーセントと、欧米の大学に比べ<sup>8</sup>格段に低い。すなわち東大の留学生、外国人教員比率は、世界的に極めて低い数値であり、前述のように、東大の世界レベルの評価を下げる大きな要因である。

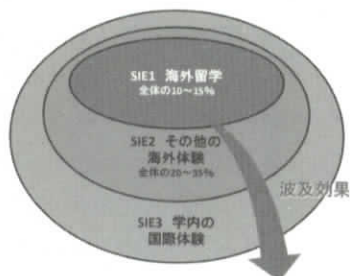
そこで、今回の中間発表では具体的な目標を、2020年までに、留学生比を12パーセント以上（学部12.2パーセント、大学院生21.7パーセント）に、外国人教員については、10パーセント以上という数値を掲げている。

## 5.2. ‘Significant International Experience for All’ (以下SIE)」

SIEは、東大の国際化「グローバル・キャンパスの実現」の根幹ともいえるシナリオで「2015年までに学部生全員に国際的な学習体験をさせる‘Significant International Experience for All’ (以下SIE)」とするものである。（下図参照）

### ⑤ 全員に国際的な学習体験を

“Significant International Experiences for All”  
学部卒業までの国際的な学習体験（将来イメージ）



- SIE1の例
  - ・協定校で単位取得を伴う留学を行う
- SIE2の例
  - ・語学留学や海外サマースクールを経験する
- SIE3の例
  - ・全ての日本人学生が留学生との交流体験を持つ
  - ・全学生が英語による授業を履修する
  - ・コミュニケーション能力の向上の例
  - ・全員がTOEFL等を受験し卒業までに半数以上が留学可能な水準を達成する

東大は、国際的な学習体験「SIE」を以下の3つのカテゴリーに分けている。

「SIE 1」：海外留学

「SIE 2」：海外体験：

「SIE 3」：学内における国際体験：

これらの活動を通し学部生全体の国際性を涵養するとしている。

このシナリオでは、学部生全員は、外国人教員の英語による授業が行われている「グローバル・キャンパス」で学ぶものとし、加えて学内における留学生との交流を通して、学内にいる事で「SIE 3」の環境を体験できるとする。その上で、語学留学やサマースクール、海外インターンシップを経験する学生を「SIE 2」、また、「協定校で単位取得を伴う留学」を果たす学生を「SIE 1」と位置づけている。「SIE 2」の比率を学部生全体の20～35パーセント、そして「SIE 1」については、全体の10～15パーセントと見積もっている。これらの3種類（「SIE 3」、「SIE 2」、「SIE 1」）のいずれか、または、複数の活動を通し在学中に学部生全体の国際性を涵養するとしている。

## 6. グローバル・キャンパス実現の課題

### 6.1. 優秀な外国人教員獲得への課題

東大自身も「グローバル化に伴う国際的な競争は産業界に止まらず、大学についても優秀な学生・研究者の獲得をめぐる競争という形で活発になってきている。」（東京大学：2011）と、その競争の激しさを自覚している。優秀な外国人教員の確保は大学の教育の質に直接的に関わり、また、留学生を含む優秀な学生の吸引や、大学のアカデミックレベルに深く関連する。殊に留学生比率の向上を目指し、かつ優秀な留学生の増加を目標とするならば、世界的なレベルの学者、研究者が英語を用いて教育を行う事が不可欠である。すなわち、優秀な外国人教員を獲得できなければ、東大の国際化が実現する可能性は極めて低い。この優秀な人材獲得は国家の最重要課題で、「海外から優秀な教員や学生を集めることにより、その研究水準を高め、さらに優れた人材を引き付ける好

循環をどう生むかが非常に重要で、それができない国は沈んでいく」（2012：相沢）と言われている。世界では、これまでに無い程、優秀な人材獲得競争が激しさを増しているのである。

しかし、東大を含む、いわゆる日本の「大学業界」では、世界的なレベルで活躍する優れた外国人学者／研究者を獲得する事は極めて困難な状況にある。

#### 6.1.1. 優秀な外国人教員と留学生確保の課題

日本の大学における外国人教員の雇用形体が非常に特徴的で、多くの大学では、「任期付」という制度が適応される。この制度は、文部科学省の「教員・研究者等の外国人材受入れ促進策」のなかでも、「任期付外国人の配置」という文言で示され、同省も推進<sup>9</sup>している。この制度は、「研究者の流動性の促進」というポジティブな側面が表面に出されているが、外国人教員に、より多くこの制度が適応されている実態を批判する声も大きい(除：2004)。諸外国と比較し著しく低い外国人教員比率の増加を図るための施策であるが、数年（主に1～3年）という任期のために、優れた教員や研究者が、所属する大学／研究機関を辞してまで日本の大学にくる現実性は極めて低い（吉川：2010）。また、たとえ数年間、日本の大学において教育、研究に当たったとしても、数年で指導教官が離職する大学を、優れた留学生が選ぶとは考えにくい。学生が留学先を選択する際に最も大きな要因となるものは、「研究分野で著名な学者や教員の指導」があげられるからである。加えて、数年の任期期間では、研究成果も限られたものとなる可能性が大きく、この点でも、優秀な教員、研究者が日本にの大学に移籍するインセンティブは低いと言えるのであえる。

従って、この「任期付制度」の廃止なくして優秀な教員・研究者、また、優れた留学生を惹き付けることは極めて非現実的である。

#### 6.1.2. 大学における「ガラパゴス的意識」の改革

日本の大学は、その国際的競争力に対する意識の低さがよく指摘される。また、大学教員は国際化への危機感が薄く、その意識改革が必要であるという見解も多い（2012：小泉）。6.1.1. で述べられた条件で、「東京大学」とい

うドメスティックなブランドに頼り、世界の優秀な人材（教員／学生）を惹き付けられるというメンタリティーでは、すでに国際標準から外れている。

言語も社会も全く異なる環境の下、一部日本人や留学生の為に英語で授業を行い、それに加えて、英語でのコースの運営をするために、著名な大学教員や研究者が来ると期待すること自体が国際感覚に欠けるとの指摘もある（Lim: 2008）。また、「日本の大学では、外国人教員は、雇用条件の不利に加え、いわゆる‘大学の広報目的’」で、日本の大学が世界のトップになれない原因は、『殆どの日本の大学教員は、外国人教員や留学生の大幅な増加を望まない。少人数の‘客’としてのみ歓迎する』等の指摘（Klaphake: 2010）がある。上記の様に、雇用条件や、大学、教員の意識が国際標準から離れていることに加えて、大学業務が日本語で行われる現状から、外国人教員の獲得は諸外国に比べ圧倒的に不利であり（Yonezawa: 2003）、日本の大学の「国際化」を疑問視する意見も多い。

Burgess (2010)によると、隣国の韓国や中国は、上記のような問題点を日本より早い段階で気付き変革をとげたとしている。それが現在の大学の国際競争力の差という結果としてあらわれているとの指摘もある。ここ数年の世界大学ランキングの動向、特にアジアの大学のランキングの変動から Burgess (2010)の指摘の正当性が読み取れる。

上記のような批判を分析すると、日本の大学において外国人教員はあくまで「VISITER／客扱い」、すなわち、「そと」に属しており、学内のマジョリティーである日本人教員がいる「うち」には入ることが許されない（Lebra: 2004）、極めて古い「ガラパゴスの社会と意識構造」を持つことがわかる。

現状のように「そと」の外国人教員が、英語での授業を担当し、「うち」の日本人教員は、従来通りの授業を担当するのでは、学内に2つのストリームが出現するだけで、真の国際化とはほど遠い。大学において「国際化」を実行するには、日本人教職員の意識改革が不可欠であろう。

近年、東大でも英語のみで学位を取得出来るコースもあり<sup>10</sup>、また英語による授業科目数も学部で59科目、大学院で262科目ある。留学生の意識調査では、

「英語による授業を提供する事で東大の魅力が向上する」、また、「英語による授業を増やすべき」、という意見が約8割を占め、やはり留学生を惹き付けるには、少なくとも学内の「英語環境の向上」が、必須であることが分かる。同調査では、「理系については、教員・学生の英語力不足」を理由とし、英語で授業をしても魅力が向上しないという厳しい意見もある。教職員を含めた大学全体が、危機感を持ち、自らの英語運用能力を向上させる事が「グローバル・キャンパス実現」に向けた具体的な作業のプライオリティーであると言える。

この点、企業は大学よりもかなり意識が高いといえる。

世界で競争を繰り広げる企業の中でも「楽天」や「ファーストリテイリング」が実施している『社内英語公用語化』などは、大学においても、おおに見習う点が多い<sup>11</sup>。楽天は2年間の準備期間を経て、2012年7月から社内で使われる全ての業務を英語で行うが、その理由として(1)同じ情報を同時に全スタッフが共有するため、(2)国内の人材の国際化、(3)優秀な人材確保、の3点をあげている<sup>12</sup>。また、通訳を使った社内会議では、「うち」と「そと」という感覚が生じ一体感が無かったとしている。

大学の国際化には、この「ガラパゴス的社會とその意識構造」の変革が必須である。「英語での授業」は、数年間のサイクルで入れ替わる「外国人教員」に担当させ、自らは変化しないという古い意識を持つ限り、優秀な外国人教員の獲得は不可能と自覚し、自らが変革することが必要である。

## 6.2. 「グローバル・キャンパスの実現」に向けた課題

「グローバル・キャンパスの実現」で課題となるのが、この行動計画の最大のパイを占める、学内における国際体験「SIE 3」の有効性が挙げられる。学内の国際体験とは、(1)「英語による授業を履修すること」と、(2)「海外留学生との交流」によって可能であると仮定されている。(1)については英語科目の必修化等の手段で全学部において実施可能であろう。しかし、「英語による授業」という表現は非常に曖昧で、果たして学生がどのようなレベルの授業を受講するものか<sup>13</sup>等、問題がある。加えて、週数回の授業を履修すること



によって、学生の国際感覚・異文化コミュニケーションレベルがどの程度向上するのかについても疑問が残る。

また、(2)については、学生個人の主体性にまかされ、現在「東大の50パーセント以上の学生が、留学生と付き合いが無い」とする状況から、「留学生数の増加」を根拠に「留学生との交流向上」と結論付ける事は危険である。このような不確かな「SIE 3」を基礎とした、「学部全体が国際体験を持つ」というシナリオ全体に甘さが見られる。

### 6.3. 日本における留学生の実態と東大目標数値「留学生12パーセント」

平成23年5月1日現在、日本で学ぶ留学生の総数は138,075人である。その中で、中国・韓国・台湾からの留学生が突出して多く、全留学生比の79.5パーセントを占めている。

#### 出身国（地域）別留学生数

##### (1) 出身国（地域）別留学生数

中国・韓国・台湾からの留学生を合わせると、全留学生に占める割合は79.5（前年度78.8）%となっている。

国(地域)名	留学生数	構成比	国(地域)名	留学生数	構成比
中国	87,533人	63.4%	ドイツ	393人	0.3%
韓国	17,640人	12.8%	イギリス	364人	0.3%
台湾	4,571人	3.3%	サウジアラビア	336人	0.2%
ベトナム	4,033人	2.9%	ロシア	331人	0.2%
マレーシア	2,417人	1.8%	カンボジア	326人	0.2%
タイ	2,396人	1.7%	カナダ	286人	0.2%
インドネシア	2,162人	1.6%	ブラジル	272人	0.2%
ネパール	2,016人	1.5%	ラオス	248人	0.2%
アメリカ	1,456人	1.1%	エジプト	235人	0.2%
バングラデシュ	1,322人	1.0%	オーストラリア	231人	0.2%
モンゴル	1,170人	0.8%	イラン	229人	0.2%
ミャンマー	1,118人	0.8%	スウェーデン	193人	0.1%
スリランカ	737人	0.5%	ウズベキスタン	191人	0.1%
インド	573人	0.4%	シンガポール	186人	0.1%
フランス	530人	0.4%	その他	4,082人	3.0%
フィリピン	498人	0.4%			
計					
138,075人					100.0%

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO） 平成24年1月



## 出身国（地域）別留学生数上位5位

中国	87,533人	(1,360人(1.6%)増)
韓国	17,640人	(▲2,562人(▲12.7%)減)
台湾	4,571人	(▲726人(▲13.7%)減)
ベトナム	4,033人	(436人(12.1%)増)
マレーシア	2,417人	(▲48人(1.9%)減)

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）平成24年1月

日本に留学してくる学生の上位5ヶ国の中で、中国、ベトナム、マレーシアは、9月入学、韓国は3月、マレーシアは1月入学を本国で実施している。換言すれば、日本で学ぶ留学生の約8割の学生は、学事歴の違う4月入学にも関わらず、日本に留学していることがわかる。

東大における留学生の調査<sup>14</sup>（平成21年）では、留学生比は、前述のように、学部生全体の僅か1.9パーセント、大学院で18.6パーセントである。その出身国を見てみると、上位5カ国は、中国（30.1パーセント）、韓国（22.6パーセント）、台湾（5.7パーセント）、タイ（4.5パーセント）、ベトナム（4.0パーセント）となっている。外国人留学生の地域別内訳では、アジア（79.7パーセント）が全体の8割弱を占め、次いでヨーロッパ（8.9パーセント）、中南米（3.7パーセント）、北米（2.9パーセント）、中近東（2.2パーセント）、アフリカ（1.4パーセント）、オセアニア（1.1パーセント）と、留学生の大半がアジア諸国の学生であることがわかる。

ここで多数の優秀な人材を世界に派遣する国の一つであるインドに注目したい。米国で学ぶ外国人留学生数のトップは中国人で、次いで2位がインド人、3位が韓国人である（安藤：2012）<sup>15</sup>。インドは日本と同様、世界で数少ない春学期入学の実施国である。しかし、彼らは、学事歴で整合性のある日本ではなく、米国に10万人もの留学生を送り出しているのである。東大におけるインドからの留学生の実数は掴めないが、日本における留学生全体の比率も0.4パーセントと極めて低い。学事歴の整合性と、留学生の吸引力をこの例から学ぶ必要がある。

秋学期導入にのみによって、9月入学が実施されている諸外国の学生が、東大に留学することはない。東大は、実数である12パーセント比を掲げることもよりも、自身が示すように、教育システムそのものの透明性、国際通用性、互換性を高めながら、教員・教育の質を向上させる事が最重要課題であろう。これらの要素が揃ってこそ、世界の「優秀な留学生」の獲得に成功するのである。

## 7. おわりに

本稿では、東京大学の秋学期入学導入をめぐり、日本の大学の国際化について考察を行った。日本のリーディング大学である東大が、その「国際性」において、諸外国の大学と比べた時、如何に世界的競争力の観点から欠如しているのかを世界大学ランキング結果をもとに分析した。また、日本の大学の国際化には、優秀な外国人教員の確保に向け、その雇用形態の見直しと、教職員を含む大学全体の意識改革が急務であり、それらが大学の国際化に直接繋がる事を指摘した。

9月入学は、東京大学が優れた留学生・教員の確保に向けた世界競争に正面から突入したことを表す。ボーダレス化が加速する世界各国では、「優秀な人材の確保」を国策として明確な国家的戦略のもと、様々な施策が繰り広げられている。優秀な人材を獲得出来ない国に未来はない。東京大学の秋学期入学導入という変化が、日本の社会構造、そして、意識構造の変革にまで寄与することを期待する。

### 【参考文献】

- 徐 龍達(2004) 「日本の大学国際化のための外国人教員の任用」 広島大学高等教育研究開発センター 大学論集 第35集 pp293-310
- 吉川 真理子(2011) "Global 30" Japan's Latest Project to Internationalise Higher Education: Challenges to implementation and relevance to creating a multicultural Japanese society *East Asian Review* Vol.14 The Asian Research Institute Osaka University of Economics and Law
- 米沢 彰純(2003) Making World-Class Universities: Japan's Experiment. *Higher Education*

- Management and Policy*. Vol. 15, No. 2, OECD
- Libra, T. S. (2004) *The Japanese self in cultural logic*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- Lim, L. (2008) Japan's 300,000 International Student Plan. The Asia-Pacific Sub-regional Preparatory Conference for the 2009 World Conference on Higher Education, 25 September 2008. Macao, PR China
- 東京大学 (2011) 将来の入学時期の在り方について ―よりグローバルに、よりタフに― (中間まとめ) 入学時期の在り方に関する懇親会  
<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/pdf/20120120interim.report.pdf>
- 田中 明彦 (2009) 「東京大学における国際化・国際協力への取り組み」  
<http://www8.cao.go.jp/cstp/sonota/kagigaiko/2kai/siryoi-1.pdf>
- 文部科学省 (2008) 留学生の就職支援と大学における外国人教員の受入れ  
独立行政法人 日本学生支援機構 平成23年度 外国人留学生在籍状況調査結果
- JSPS London (2011a) 「THE 世界大学ランキング 2011-2012年版について」  
[http://www.jsps.go.jp/j\\_kai\\_gai\\_center/data/news/2011/uk\\_20111007.pdf](http://www.jsps.go.jp/j_kai_gai_center/data/news/2011/uk_20111007.pdf)
- JSPS London (2011b) 「QS 世界大学ランキング 2011-2012年版について」  
[http://www.jsps.go.jp/j\\_kai\\_gai\\_center/data/news/2011/lon\\_20110907.pdf](http://www.jsps.go.jp/j_kai_gai_center/data/news/2011/lon_20110907.pdf)
- Times Higher Education "World University Rankings (2011-2012)"  
<http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2011-2012/top-400.html>
- Quacquarelli Symonds Ltd. "QS World University Ranking 2011-2012"  
<http://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2011>
- Burgess, C. (2010). Higher education: opening up or closing in? Contradictory reform goals could scotch chances of success. Japan Times. 23 March 2010  
<http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/fl20100323zg.html>
- Klaphake, J. (2010). A foreigner-friendly field of dreams? International faculty, students, must be valued, not treated as visitors. 30 March 2010. The Japan Times Online.  
<http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/fl20100330zg.html>
- 相沢 益男 (2012) 大学秋入学、変革のうねり「沈む日本」に危機感  
日本経済新聞 2012年2月20日  
[http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG1800B\\_Y2A210C1SHA000/](http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG1800B_Y2A210C1SHA000/)
- 安藤 茂彌 (2012) 「東大9月入学論議はコップの中の嵐 問われるべきは教育の密度だ」  
DIAMOND ONLINE <http://diamond.jp/articles/-/16233>
- 小畑 重和 (2012) 『7月からの本格移行でさらに徹底!? 楽天で新入社員が体験する「英語社内公用語」の実態』 DIAMOND ONLINE <http://diamond.jp/articles/-/16980>
- 下條 信輔 (2012) 「世界大学ランキンと東大秋入学」 WEBRONZA 2012年1月26日  
<http://astand.asahi.com/magazine/wrscience/2012012300012.html>
- 日本経済新聞 (2012) 『人材競争 国境なく 秋入学、「内向き」変える好機に』 2012年2月21日  
<http://www.nikkei.com/article/DGXDZO38966740R20C12A2MM8000/>

注

- 1 「将来の入学時期の在り方について -よりグローバルに、よりタフに- (中間まとめ)」  
東京大学 入学時期の在り方に関する懇親会  
<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/pdf/20120120interim.report.pdf>  
<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/pdf/20120120interim.report.pdf>
- 2 日本経団連は、2011年6月13日に「グローバル人材育成に向けた提言」の中で、大学の「9月入学実施」を盛り込んでいる。<http://www.keidanren.or.jp/policy/2011/062gaiyo.pdf>
- 3 「グローバルなリーダー人材の育成と活用研究会」【産業競争力懇談会2011年度 研究会最終報告】<http://www.cocn.jp/common/pdf/thema46-L.pdf>
- 4 「将来の入学時期の在り方について -よりグローバルに、よりタフに- (中間まとめ)」  
東京大学 入学時期の在り方に関する懇親会 pp10 図表A 参照
- 5 『教育』(30%)：教員1人当たりの学生数、PhD取得学生数、PhD取得数/学士号取得数比、教員1人当たりのPhD取得学生数、教員1人当たりの収入  
『研究』(30%)：研究評価結果、教員1人当たりの研究収入及び出版論文数  
『論文被引用回数』(30%)：論文1本当たりの平均被引用回数  
『産業界からの収入』(2.5%)：教員1人当たりの産業界からの収入  
『国際的な取り組み』(7.5%)：留学生/国内学生比、外国人スタッフ/国内出身スタッフ比、国際共著の研究ジャーナル、出版数留学生/国内学生比、外国人スタッフ/国内出身スタッフ比、国際共著の研究ジャーナル出版数
- 6 『学術面の評価』(40%)、『学生一人当たりの教員数』(20%)、『教員一人当たりの論文被引用数』(20%)、『企業による評価』(10%)、『外国人教員比率』(5%)、『国外留学生比率』(5%)から評価される。
- 7 スタンフォード大学：学部7%/大学院21% (全体21%)、イエール大学：学部10%/大学院23% (全体17%)、北京大学：学部5%/大学院2% (全体7%) ソウル代大学：学部6%/大学院15% (全体10%)  
「将来の入学時期の在り方について -よりグローバルに、よりタフに- (中間まとめ)」  
東京大学 入学時期の在り方に関する懇親会 pp46 資料18 参照
- 8 マサチューセッツ工科大学：14%、オックスフォード大学：20% スイス連邦工科大学チューリッヒ校：60%、「将来の入学時期の在り方について -よりグローバルに、よりタフに- (中間まとめ)」東京大学 入学時期の在り方に関する懇親会 pp47 資料20 参照
- 9 国際化拠点整備事業(グローバル30)  
◀具体的な取組内容▶
  - ・英語で学位が取得できるよう体制を整備(英語教材の開発、日本人教職員の研修実施を含む)
  - ・専門科目を英語で授業を行うための教員の国際公募・任期付き外国人教員の配置
- 10 大学院29コース(2010年実績)、学部2コース(2012年10月開設予定)
- 11 先駆となったのは、日産のカルロスゴーン社長。彼の就任で、経営陣の会議が英語で行われるようになった。また、2000年代初頭にいち早く英語を公用語化した会社にSMK(電子部品製造)がある。
- 12 『壮絶 楽天の英語公用語化』DIAMOND ONLINE (2012)
- 13 国際的に通用性のある番号を科目ごとに付け、諸外国の大学と単位互換性を持つ事の重要性は指摘されている。100番台は基礎科目、200番台は中級科目、300番台は上級科目といったように、授業科目のレベルに応じた番号

- 14 「東京大学における国際化・国際協力への取り組み」

<http://www8.cao.go.jp/cstp/sonota/kagigaiko/2kai/siryoi1-1.pdf>

- 15 アメリカで学ぶ留学生総数は、72万人。中国人留学生15万人、インド人留学生10万人、韓国人留学生7万人、日本人留学生2万1千人

# Handwritten Title

Main body of handwritten text, consisting of several lines of cursive script.

Bottom section of handwritten text, possibly a signature or a concluding note.